野口　雨情

童謡詩人・のぐち　うじょう　Ujo Noguchi
1882～1945

【明治15年～昭和20年】

来草年
昭和3年/1928

『十五夜お月さん』『シャボン玉』など時を越え、愛される唄を創作。

現代でも歌い継がれている歌の作詩を手がけた童謡詩人。茨城県生まれ。大正8（1919）年に童謡運動を開始し、民謡や童謡の創作や理論的指導などを精力的に行った。『七つの子』『青い目の人形』などに見られる純真な童心を歌い上げた作品を次々と創作。典型的な童謡イメージを確立した功績は大きい。また、大正12（1923）年に発表した『船頭小唄』が同名映画の主題歌となり全国的に流行した。のち『波浮の港』『紅屋の娘』などのレコードが大ヒット。大衆に親しまれる歌謡曲も数多く手がけた。

草津小学校の沿革誌に「昭和３年９月26日、野口雨情、中山晋平両文士、当町民謡研究トシテ来町ス」という記録があります。雨情は、草津をテーマに「草津湯の香は　ほんのりかをる／山や谷間の木の葉まで／昨夜夢見た　草津の夢を／草津湯の香の　湯の夢を／草津草津と草津の湯場を／夢に見てさえ　なつかしい…」と詩をつけています。

種田　山頭火

俳人・たねだ　さんとうか　Santouka Taneda
1882～1940

【明治15年～昭和15年】

来草年
昭和11年/1936

草庵を転住。奔放な人生を句作に託して、全国を行脚す。

定型にとらわれない自由律俳句の異才。山口県生まれ。荻原井泉水に師事し『層雲』に出句するが、父と始めた酒造経営の倒産、弟の自殺、妻との戸籍上の離婚など不運の連続と人間の崩壊を目の当たりして無常を痛感し、熊本県報恩寺で出家。以後、放浪の生活に。彼のトレードマークでもある破れた笠、えごの木の杖、鉄鉢を手に流転の日々を句に託し、酒と旅の生涯を送る。泥酔の果て、59歳で没する。戦後40年の間に50を超える句碑が建立されている。各地に見られる山頭火の足跡は今もなお生き続け、漂泊の人生は人々の心をとらえてやまない。句集に『鉢の子』『草木塔』『雑草風景』など。

昭和11（1936）年5月、信州から草津に向かった山頭火は、吾妻駅から電車に乗り込み、夕方に到着。温泉には3日間滞在し、その間、よく寝て、食べて、飲んで、考えたそうです。その時に「もめやうたへや湯けむり湯けむり」「ふいてあふれて湯烟の青さ澄む」という句を詠んでいます。

前田　普羅

俳人・まえだ　ふら　Fura Maeda
1884～1954

【明治17年～昭和29年】

来草年
昭和22年/1947

山岳を好み、清冽な自然詠で知られる「虚子門の四天王」。

村上鬼城、飯田蛇笏、原石鼎と並んで「高浜虚子門の四天王」に数えられた俳人。ホトトギス派。東京に生まれ、スタンダード石油、横浜裁判所、「時事新報」記者、「報知新聞」富山支局長などの職を経験。その後『辛夷』の選者を経て主宰となり、俳句一筋の生活を始める。生来、男性的な性格の普羅は山岳に親しみ、これを題材に多くの句を詠んだ。特に、厳しく清冽な秋冬の山岳を愛し、「奥白根かの世の雪を輝かす」など、宗教的な世界まで昇華させた自然詠が特徴的。句集に『春寒浅間山』『飛騨紬』『能登青し』『定本普羅句集』など。

富山時代の普羅の句は、その「暗さ」に創作の特徴がありますが、上州を題材にした句はむしろ「明るさ」につつまれています。句集「春寒浅間山」の「白根の巻」では、草津白根山をテーマにしたもののほか、数々の句を発表しています。「雉子啼くや月の輪のごと高嶺雪」「松蝉や白根颪に鳴き揃う」「吹雪やみ木の葉の如き月あがる」など、佳句揃い。

大野　林火

俳人・おおの　りんか　Rinka Ohno
1904～1982

【明治37年～昭和57年】

来草年
昭和25年/1950

叙情的な句風に人柄を感じさせた、昭和の俳人。

臼田亜浪門の俳人。横浜市生まれ。横浜一中時代から俳句を始め、俳誌『芋の葉』を作り、前田普羅の『加比丹』に投句。その後、臼田亜浪の門下に入り『石楠』に投句を続け、のちに『石楠』の最高幹部同人になる。『濱』の創刊、『俳句』（角川書店刊）の編集なども行い、昭和44（1969）年『潺潺集』で蛇笏賞を受賞する。昭和53（1978）年から俳人協会会長。円満な人格を反映したような叙情的な作風が特徴で、晩年は“老”を追求した作品を多く発表。門下に、野沢節子、目迫秩父、村越化石（草津・楽泉園）ら。句集に『海門』『冬雁』など。

林火は、草津国立癩療養所・栗生楽泉園の病者を指導した「高原」の俳句欄選者を、25年間務めました。昭和50（1975）年には、楽泉園・俳句会出身で、林火門下生の村越化石が、俳句の最高賞「俳人協会賞」を受賞。これを機に、「高原」の名は、俳句界に広く知られるようになりました。林火が草津周辺で詠んだ作品は137句にも及びます。

水原　秋櫻子

俳人・みずはら　しゅうおうし　Syuoushi Mizuhara
1892～1981

【明治25年～昭和56年】

来草年
昭和40年/1965

『馬酔木』を主宰。俳句の神髄に迫った、近代句界の巨星。

近代俳句の巨匠。写生と短歌的抒情を統一し、調べによって感動をあらわす主観写生の句風で知られている。東京都生まれ。中学時代より文学書を漁り、短歌に熱中していたが『渋柿派』にふれ、作句を始める。虚子門に移り、昭和22（1947）年、東大俳句会の創立に関わる。『ホトトギス』の“四S”（ほかに阿波野青畝、山口誓子、高野素十）と呼ばれ花形に。しかし、同派の「花鳥諷詠」の純客観写生に飽きたらず、『破魔弓』を『馬酔木』と改題して主宰。石田波郷や加藤楸邨らの逸材を育てたことでも有名。その後、無季非定型に進む新興俳句運動の旗手と目されたが、有季定型を守って独自の作風を磨いた。

ベルツ博士胸像の傍ら、西の河原に立つ碑には、秋櫻子の句が刻まれています。「胸像は永遠に日本の秋日和」。作者の意図は「胸像にそそぐ秋日和は、ベルツの心にふれているように、すがすがしい」という点にあり、草津の恩人・ベルツの遺徳を讃えています。また、昭和40（1965）年、41（1966）年に来草。記録には、高齢の秋櫻子が草津に遊んだ様子が伝えられています。

竹久　夢二

画家・たけひさ　ゆめじ　Yumeji Takehisa
1884～1934

【明治17年～昭和9年】

来草年
昭和4年/1929

「夢二調」といわれた美人画と、感傷的詩文で、一世を風靡。

画家。詩人、グラフィック・デザイナーの先駆としても活躍。岡山県生まれ。早稲田大学中退後、少年少女雑誌にロマンティックな挿絵、詩を発表し、注目された。藤島武二のモダンな装飾性と鏑木清方の美人画から影響を受け、目に憂愁をたたえた「夢二調美人画」を確立。感性豊かな抒情的表現は、絵はがき、封筒、半襟のデザインなどに用いられ、幅広く愛された。代表作に『夢二画集』や詩集『どんたく』。詩画、詩歌集などの出版物は50を越える。岡山市と伊香保町に夢二美術館がある。また名曲『宵待草』の作詩者としても有名。

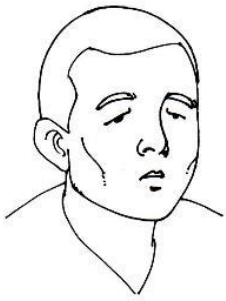
あたたかい人情にふれ、上州をこよなく愛した夢二。草津を訪れた際には、よく通ったカフェーがあり、彼が「夢」と書いた店の看板も最近まで掛けられていたとか。草津には夢二ゆかりの品がありましたが、惜しいことに現在ではほとんど残されていません。また、町内のサロン「雲」では、草津の画家・千木良富士、山口力雄と三人展を開きました。

山下　清

画家・やました　きよし　Kiyoshi Yamashita
1922～1971

【大正11年～昭和46年】

来草年
昭和26年/1951



「裸の大将」のモデルとしても名高い放浪画家。

東京都生まれ。生来の知恵遅れのためにいじめられ、反抗して刃傷沙汰などを起こし、精神薄弱教育擁護施設に収容される。ここで、手工芸作業としての貼絵に才能を伸ばす。式場隆三郎らの働きかけで世間に紹介されてからは、その無心な表現力が注目を集めた。昭和15（1940）年秋に、18～21歳まで徴兵検査の恐怖から、学園を脱走。各地を放浪する。戦後も、学園での絵の制作と気ままな放浪の旅を繰り返し、旅先での出来事を『放浪日記』に収録。昭和30（1955）年に画集を刊行。各地で個展が開かれ、「日本のゴッホ」と称された。

山下清は、草津を訪れた第一印象を「草津にもろてん風呂がある」と端的に表現。西の河原などをさまよい、露天風呂に入浴、草軽電鉄駅で一泊しました。その時の様子は代表作『放浪日記』に描かれています。また、貼絵・西の河原「ろてん風呂」では、草津で遭遇した人たちの群像を描いています。昭和33（1958）年、取材のため再び来草した際には、天狗山でスキーに興じたりしました。

谷内　六郎

画家・たにうち　ろくろう　Rokurou Taniuchi
1921～1981

【大正10年～昭和56年】

来草年
昭和38年/1963年

懐かしさが胸を満たす画調。「週刊新潮」の表紙絵でお馴染み。

郷愁感あふれる叙情的な絵で知られる挿絵画家。東京生まれ。最初は漫画家として出発し、『笛吹小次郎』や『魔の地中城』など、子ども向けの漫画を描く。昭和30（1955）年、『行ってしまった子　大人の絵本・幼き日の夢より』で、第1回文芸春秋漫画賞を受賞。これを機に、挿絵画家へと転身。昭和31（1956）年に創刊した「週刊新潮」の表紙絵は、長年に渡り、多くの人に親しまれた。この表紙絵は死の直前まで執筆。晩年は障害者施設「ねむの木学園」において、児童画教育に尽力。優れた絵本も発表しており、作品には『ぎんのわっか』『びんのそら』などがある。

谷内六郎は冬の草津を描くために、昭和38（1963）年に来草。スキー場の近くに並ぶ商店の窓から、少女たちが糸で吊した人形で「リフトごっこ」している光景を描いたもの。スキーヤーで賑わう町ですが、子どもたちの間には、ゆったりとした空気が流れている様子が伝わってきます。この絵は新潮社発行の『谷内六郎展覧会（冬・新年）』に掲載されました。

前田　青邨

日本画家・まえだ　せいそん　Seison Maeda
1885～1977

【明治18年～昭和52年】

来草年
昭和27年/1952

歴史画、肖像画に秀で、古美術の保存・復元にも尽力。

大和絵風の線画と古い様式を生かし、知的な装飾的構成を確立した日本画家。岐阜県生まれ。本名：廉造。尾崎紅葉のすすめで梶田半古の画塾に入門。当時の塾頭は、のちに日本画家の巨匠と言われた小林古径。今村紫紅・安田靫彦らと紅児会を結成。初期文展で認められる。日本美術院展でも中心的な画家として活躍。その後、東京芸術大学教授、昭和30（1955）年には文化勲章を受賞。歴史画・武者絵などの肖像画・花鳥画など幅広く描き、日本画壇の長老となる。法隆寺金堂壁画再現事業や高松塚古墳壁画模写の総監督に委託された。代表作は『洞窟の頼朝』『紅白梅』『風神雷神』『唐獅子』など。

青邨は、大正初期の再興第一回院展に『湯治場』三幅対（伊香保・修善寺・草津）を出展しています。この中の草津の絵は、江戸末期の案内図を見て描いたものですが、のちに実際に草津を訪れ、位置関係が違うことに気づき昭和27（1952）年に書き直しました。下絵は、岐阜県中津川市の「青邨記念館」にあり、書き直された絵は最高裁判所にかけられています。

岡本　太郎

洋画家・おかもと　たろう　Tarou Okamoto
1911～1996

【明治44年～平成8年】

来草年
昭和50年/1975年

戦後日本を代表する洋画家。大阪万博『太陽の塔』も制作。

「芸術は爆発だ！」のキャッチフレーズで、お茶の間でも人気に。父は漫画家の岡本一平、母は歌人の岡本かの子。昭和4（1929）年、東京美術学校（東京芸大）を半年で中退。両親とともに渡仏し、昭和6（1931）年、パリ大哲学科に入学。翌年、ピカソの作品に触発され、作品制作に励む。純粋抽象の作品群によって仏批評家の称賛を受ける。昭和12（1937）年、初の画集『OKAMOTO』を出版。しかし、同年『傷ましき腕』を発表、抽象画と訣別した。パリ陥落とともに帰国。戦後は二科会会員になって対極主義を主張。旧都庁舎の陶板壁画の制作で仏国際建築絵画大賞、著書『忘れられた日本』では毎日出版文化賞を受賞。昭和45（1970）年、大阪万国博覧会のシンボルとなった『太陽の塔』の制作でも知られる。

岡本太郎は、昭和50（1975）年に来草。目的は温泉とスキー旅行だったようです。その時、たまたま町の関係者と親しくなり、草津の都市計画の依頼を受けました。湯畑周囲の石柱を並べた「遊歩といこいの場」は、太郎の監修によるものです。

中山　晋平

作曲家・なかやま　しんぺい　Shinpei Nakayama
1887～1952

【明治20年～昭和27年】

来草年
昭和3年/1928年

歌謡史を彩る名曲を、数多く作曲したヒットメーカー。

童謡、歌謡曲、新民謡、芸術歌曲の作曲家。郷土の長野から上京し、島村抱月家の書生を務め、東京音楽学校（東京芸大）に通う。抱月が主宰する芸術座の劇中歌として作曲した『カチューシャの唄』『ゴンドラの唄』がヒットして人気に。大正10（1927）年、大ヒットした『船頭小唄』を作曲。以後も流行歌を生み出し、『東京音頭』や『東京行進曲』など、一連の歌謡曲は「晋平節」と呼ばれた。また、童謡運動にも参加。『証城寺の狸囃子』『てるてる坊主』『雨降りお月さん』など傑作を残す。さらに新民謡運動や芸術歌謡でも大きな役割を果たす。彼の作品は親しみやすさに特徴があり、幅広い層から支持された。

昭和初期、晋平は『草津小唄』（相馬御風作詞）を作曲しています。当時、流行していた新民謡の波に乗り、小唄はたちまち町内に広がり、湯もみの時やお座敷で唄われました。その後も土地に根付き、今でもお座敷で唄い継がれています。

服部　良一

作曲家・はっとり　りょういち　Ryouichi Hattori
1907～1993

【明治40年～平成5年】

来草年
昭和45年/1970年

流行歌から交響曲まで。幅広い音楽で人々を魅了した、名作曲家。

生来の音楽好きで、実践商業在学中に少年音楽隊に入る。卒業後は大阪放送局（NHK）のオーケストラに入団。昭和8（1933）年に上京。昭和11（1936）年、コロムビアレコードに専属作曲家として入社。初期作品『別れのブルース』は日中戦争前線の兵士に愛唱され、昭和13（1938）年、慰問団の一員として中国を旅行する。昭和15（1940）年、『蘇州夜曲』を作曲。軍歌は作らず、厳しい世相の慰めとなる歌を世に送る。戦後の作品は、『東京ブギウギ』を始め、『銀座カンカン娘』『青い山脈』など多数。昭和46（1971）年には交響詩曲『ぐんま』を作曲。流行歌に限らず、映画音楽、劇音楽、社歌、校歌など、作品は3,000曲を数える。

温泉街に宿泊した翌日、良一は車で白根山頂へ向かいました。ロッジで休憩をしている時、良一は自分の子どもと間違える見知らぬ老婆と遭遇。老婆は脳軟化症だったようで、初めは驚いていた良一も、迷惑がらず、老婆に手を引かれるまま、山道を登っていきました。良一のやさしい心が伝わる、微笑ましいエピソードです。

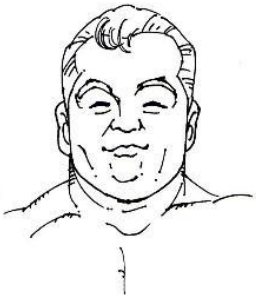
力道山

プロレスラー・りきどうざん　Rikidouzan
1924～1963

【大正13年～昭和38年】

来草年
昭和35年/1960年

得意技は、必殺の空手チョップ。日本中を熱狂させた格闘家。



力士、プロレスラー。本名は金信洛。故郷亡き児として北朝鮮や満州を彷徨、義父・玉の海梅吉に拾われて二所ノ関部屋に入門。昭和21（1946）年に入幕、破竹の勢いで昇進を続けるが、翌年に力士を廃業する。昭和26（1951）年、プロレスラーに転身。世界の屈強レスラーを次々に倒した後、アメリカ本土に上陸。北米大陸を転戦し、300戦中、敗戦はたったの5回。昭和28（1953）年、凱旋帰国して「日本プロレス協会」を発足。黒タイツに空手チョップの力道山は子どもたちのアイドルで、プロレス放送がある日は街頭や店頭のテレビの前に大勢の人が集まり、彼の活躍は復興に向かう日本人を勇気づけ、人気は絶大となった。

力道山が来草したのは、第二回国際リーグ戦が草津で開催された時のこと。日本プロレス協会の好意により、草津でのドリームマッチが実現しました。各国の代表選手はもちろん、圧倒的な人気を誇る力道山の出場には、「本物の力道山を見たい」と大人も子どもも試合を待ち望み、草津の町は活気づきました。

栃錦　清隆

力士（44代横綱）・とちにしき　きよたか　Kiyotaka Tochinishiki
1925～1990

【大正14年～平成2年】

来草年
昭和58年/1983年

多彩な技を武器に、横綱に君臨。相撲史に残る「栃若時代」を築く。

東京都出身の力士、44代横綱。春日野（栃木山）の養子となり、昭和14（1939）年に春日野部屋から初土俵。稽古に打ち込み、48手のうらおもてを土俵に再現。技能賞を9回も受賞する。昭和29（1954）年の秋場所後、横綱に昇進。けがや病気で休場することはなかったが（兵役の時は休場）、翌年の秋場所では蓄膿症と慢性気管支炎で休場する。その後、年齢を重ねて体重が増えたことから、立ち合いの瞬発力と一気の寄りを中心とした取り口に変え、場内を沸かせた。初代・若乃花を相手に相撲史に残る名勝負を繰り広げ、「栃若時代」を築いた。昭和35（1960）年引退。優勝10回。

足に血行障害が起きた栃錦は、昭和58（1983）年に治療のために来草しました。温泉で治療しながら、群馬大学草津分院に通院。その結果、見事に病を克服し、ゴルフ場に通えるほど回復。昭和63（1988）年まで、年寄春日野を名乗り、相撲協会理事長を務め相撲界の発展に尽力しました。

モーリス・ジャンドロン

チェロ奏者、指揮者・Maurice Gendron
1920～1990

【大正9年～平成2年】

来草年
昭和55年/1980

仏ニース生まれのチェリスト。世界を周遊し、美しい演奏を披露。

パリ音楽院に学び、チェロ科を主席で卒業。さらにプラードで巨匠・カザルスに師事する。昭和25（1950）年頃から独奏家として活躍を開始し、ヨーロッパ各地からアメリカまで演奏旅行で飛び回り、各地で絶賛を博した。メニューインとグループを作って数多くの演奏を行っている。西ドイツのザールブリュッケン音楽院チェロ科教授を務める傍ら、独奏家としての活動も展開。

世界で活躍するチェロ奏者のジャンドロンは、昭和55（1980）年に行われた第1回草津夏期国際音楽アカデミー&フェスティバルに来草。講師として音楽を指導するとともに、美しい演奏を披露しました。また彼は、第9回のときも来草しています。

木下　恵介

映画監督・きのした　けいすけ　Keisuke Kinoshita
1912～1998

【大正元年～平成10年】

来草年
昭和20年/1945

『二十四の瞳』『喜びも悲しみも幾年月』ほか、感傷性ゆたかな秀作を世に。

映画からテレビドラマまで多数の作品を発表し、戦後の映画・ドラマ界に大きな影響を与えた映画監督、脚本家、プロデューサー。静岡県生まれ。写真学校卒業後、松竹蒲田撮影所技術部・監督部を経て、映画『五人の兄妹』で脚本デビュー。昭和18（1943）年の『花咲く港』では監督デビューを果たし、東宝の黒澤明監督とともに優れた新進監督に送られる山中賞を受賞。以後、二人は何かにつけて比較される立場に置かれ、後に「男性映画の黒澤」「女性映画の木下」と並び称された。感傷性ゆたかな映画を得意とし、『二十四の瞳』『楢山節考』など数々の名作・ヒット作を放つ一方、新人発掘にも鋭い感性を発揮。「木下学校」からは多くのスター、監督、脚本家が巣立った。

昭和21（1946）年、封切られた映画『わが恋せし乙女』の撮影で、北軽井沢に訪れた折り、木下監督は足をのばして草津を訪れました。その時、旅館の人と酒を酌み交わしながら、話の中に出た地方文化運動の助言が、1シーン収められていました。

今井　正

映画監督・いまい　ただし　Tadashi Imai
1912～1991

【大正元年～平成3年】

来草年
昭和29年/1954

社会派の力作を数多く制作した映画監督。代表作に『青い山脈』。

映画監督。昭和10（1935）年、東大文学部中退。東宝映画に所属し、敗戦までは風俗映画と戦意高揚映画を制作した。しかし、民主主義を啓蒙していた今井は、戦後ただちに『民衆の敵』を撮影。財閥を痛烈に批判した。昭和24（1949）年には、代表作となる『青い山脈』を発表。学園の民主化を青春喜劇の中に描いた作品は、世代を越え幅広く支持された。昭和23（1948）年の東宝争議では敗北し退社。独立プロ運動に参加する。昭和28（1953）年、戦争の悲劇を描いた『ひめゆりの塔』が大ヒット。その後は独立プロで多くの作品を撮り続けた。他の作品に『ここに泉あり』『真昼の暗黒』『橋のない川』など多数。

今井監督は、映画『ここに泉あり』の撮影のために来草。高崎市民フィルハーモニー（群馬交響楽団の前身）誕生の軌跡を描いたこの映画は、草津・楽泉園で一部が撮影されました。時には百名をこえる登場人物の撮影も有り、町民はエキストラとして協力。監督やスタッフを囲んでの懇談会も行われました。

田中　絹代

女優・たなか　きぬよ　Kinuyo Tanaka
1909～1977

【明治42年～昭和52年】

来草年
昭和20年/1945年

あふれる美貌、演技力で観客を魅了。邦画史上、最高の女優の一人。

山口県生まれの女優。13歳で大阪に出て、少女歌劇団の女優となる。大正13（1924）年、松竹下加茂撮影所に入社。やがて松竹の大スターとなる。戦前の話題作は『マダムと女房』『伊豆の踊り子』、恋愛メロドラマの傑作と呼ばれた『愛染かつら』など。戦後、演技に円熟味が増し、『西鶴一代女』『山椒太夫』『おかあさん』といった日本映画黄金時代の傑作に名演技を残す。また、自身で監督も手掛け、昭和28（1953）年『恋文』を発表。老年にさしかかると、さらに演技に深みが加わり、昭和49（1974）年の『サンダカン八番娼館・望郷』では、ベルリン国際映画祭最優秀女優賞を受賞した。

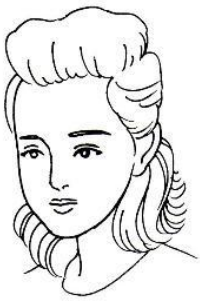
田中絹代は、各地で空襲が起きている戦争中に、芝居公演のため草津を訪れました。草津での公演は「食事は戦前と同じ物をそろえること」「各自にリュック一杯の食料品や、薬等を持たせること」等の約束の上で実現しました。公演当日、映画界を代表する大女優を一目見たさに会場は大盛況。入場を制限しても場外には山のように観衆が集まったそうです。

高峰　三枝子

女優・たかみね　みえこ　Mieko Takamine
1918～1990

【大正7年～平成2年】

来草年
昭和62年/1987



『湖畔の宿』の歌声とともに、昭和史を彩った映画女優。

映画女優。東京都生まれ。本名：鈴木三枝子。筑前琵琶宗家・高峰筑風の長女。昭和11（1936）年に松竹大船撮影所に入り『母を尋ねて』でデビュー。お嬢さん女優として売り出され、翌年には『荒城の月』『婚約三羽烏』『浅草の灯』など10本もの映画に出演する。佐野周二、上原謙、佐分利信ら松竹大船を代表する二枚目スターとコンビを組み、田中絹代らと並んで松竹大船の黄金時代を築いた。のち『湖畔の宿』が大ヒットし、歌う映画スターとしても人気を博し、戦時中は軍の慰問に駆け回った。戦後も『自由学校』『女の園』など数多くの映画に出演。昭和56（1981）年にかつての共演者・上原謙とのCM「フルムーン」で話題を呼んだ。

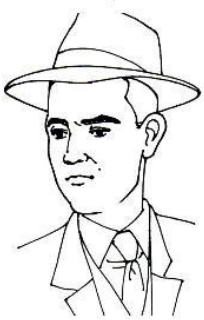
昭和の映画スター・高峰三枝子は、あるテレビ局の取材で草津を訪れました。草津を巡遊し、メリンスを草津の湯で揉み、小物入れやサイフなどを作る「ゆもみ細工」等を取材していきました。

上原　謙

俳優・うえはら　けん　Ken Uehara
1909～1991

【明治42年～平成3年】

来草年
昭和28年/1953



『愛染かつら』に主演。女性を釘づけにした、元祖・二枚目俳優。

東京都生まれ。立教大学卒業後、松竹に入社。早くから頭角を現し、清水宏監督作『若旦那・春爛漫』でデビュー。都会感覚の二枚目として、映画界に新風を吹き込んだ。昭和13～14（1938～39）年、田中絹代とのコンビで制作された『愛染かつら』三部作は、代表作となり、トップスターの座を獲得。佐分利信、佐野周二とともに、30年代後半の松竹を飾る二枚目・三羽烏に数えられた。『西住戦車長伝』などの作品では、単なる二枚目から演技派への脱却を図る。戦後、松竹を退社。フリーランスの俳優の先頭として、成瀬巳喜男監督の『めし』『山の音』を始め、『煙突の見える場所』などの作品で深みのある演技を見せ長年、活躍した。俳優の加山雄三は長男。

上原謙の初めての来草は、昭和28（1953）年、俳優としてデビューする前になりますが、その後も、妻・葉子、息子・加山雄三を連れ、毎年のように草津を訪れました。滞在の折りには、家族でスキーや温泉を楽しんでいったようです。

石原　裕次郎

俳優・いしはら　ゆうじろう　Yujirou Ishihara
1934~1987

【昭和9年~昭和62年】

来草年
昭和40年/1965

『太陽の季節』で鮮烈デビュー。日活映画・黄金時代の中心となり、長年、活躍。

慶応大学中退。昭和31（1956）年、兄・石原慎太郎が前年に芥川賞を受賞した小説を映画化した『太陽の季節』でデビュー。端役ながら、行動的な若者を強烈に演じ、“太陽族”と呼ばれた青年像の代名詞に。昭和32（1957）年の『嵐を呼ぶ男』で、スターの座を確立。長い足、野生味ある風格は若者の圧倒的な支持を得た。以後、妻となる北原三枝、浅丘ルリ子を相手に、日活青春アクション映画に立て続けに主演。日本映画の黄金時代を体現するドル箱スターとなった。昭和38（1963）年に、石原プロモーションを設立。昭和48（1973）年、東宝『反逆の報酬』を最後にスクリーンを去り、活躍の場を『太陽にほえろ！』『大都会』などのテレビドラマに移した。『銀座の恋の物語』ほか、歌手としてヒット曲も多い。

石原裕次郎は、映画『赤い谷間の決斗』の撮影のため、来草。監督は、『赤いハンカチ』などで裕次郎主演作をヒットさせた柳田利雄。殺生河原などを舞台に撮影され、デビュー間もない渡哲也が裕次郎の胸を借り、見応えのあるアクションに仕上がりました。同年の年末、日活のお正月映画として公開されました。

渥美　清

俳優・あつみ　きよし　Kiyoshi Atsumi
1928~1996

【昭和3年~平成8年】

来草年
昭和55年/1980

映画『男はつらいよ』の「寅さん」役で愛された国民的俳優。

喜劇俳優。戦後まもなく大衆演劇の門を叩き、昭和28（1953）年、浅草フランス座に入座、コントを演じる。NHKテレビ『若い季節』『夢で逢いましょう』でお茶の間の人気者に。昭和38（1963）年の映画『拝啓天皇陛下様』では、農村出の青年兵を好演。喜劇俳優として地位を確立した。そして昭和44（1969）年、『男はついらいよ』に主演。しがない旅の露天商「フーテンの寅さん」を魅力的に演じ、人気は不動に。山田洋次監督との二人三脚により、撮影された本数は『寅次郎紅の花』まで全48作。世界で最も長寿なシリーズとなった。闘病の末、平成8（1996）年他界。同年、国民栄誉賞を受賞した。

「寅さん」こと渥美清は、昭和55（1980）年、第25回作品『寅次郎　ハイビスカスの花』（マドンナ役は浅丘ルリ子）の撮影のために来草しました。撮影スケジュールが多忙のためか、宿泊はしなかったようです。

あ
E.サトウ …… 26p
安積艮斎 …… 12p
朝日姫 …… 5p
渥美　清 …… 51p
A.E.ノルデンショルド …… 17p
阿部真之助 …… 30p
飯尾宗祇 …… 9p
石川達三 …… 37p
石橋長英 …… 30p
石原裕次郎 …… 51p
犬養木堂 …… 25p
井上　靖 …… 38p
今井　正 …… 49p
入沢達吉 …… 29p
上原　謙 …… 50p
E.ナウマン …… 16p
E.V.ベルツ …… 15p
大谷吉継 …… 7p
大槻文彦 …… 18p
大野林火 …… 42p
大町桂月 …… 22p
岡本太郎 …… 45p
尾崎咢堂 …… 26p
小野湖山 …… 24p

か
賀川豊彦 …… 31p
鹿児島寿蔵 …… 35p
嘉納治五郎 …… 27p
川端龍子 …… 25p
河東碧梧桐 …… 22p
菊池　寛 …… 36p
岸田国士 …… 32p
木曾義仲 …… 3p
木下恵介 …… 48p
行基菩薩 …… 8p
清河八郎 …… 8p
小林一茶 …… 10p
小林秀雄 …… 31p
近衛文麿 …… 27p
近衛龍山 …… 6p
C.リー …… 18p

さ
西条八十 …… 40p
斎藤茂吉 …… 33p
佐久間象山 …… 13p
佐藤栄作 …… 28p
十返舎一九 …… 10p
志賀直哉 …… 20p
清水浜臣 …… 11p
J.スクリバ …… 16p
相馬御風 …… 39p

た
高野長英 …… 12p
高村光太郎 …… 39p
田川鳳朗 …… 13p
高峰三枝子 …… 50p
竹久夢二 …… 43p
田中角栄 …… 28p
田中絹代 …… 49p
谷内六郎 …… 44p
種田山頭火 …… 41p
田山花袋 …… 19p
土屋文明 …… 34p
徳富蘇峰 …… 19p
栃錦清隆 …… 47p
富田常雄 …… 20p
巴御前 …… 4p
豊臣秀次 …… 6p

な
長尾為景 …… 3p
長塚　節 …… 23p
中山晋平 …… 46p
丹羽長秀 …… 4p
野口雨情 …… 41p

は
服部良一 …… 46p
林芙美子 …… 37p
平井晩村 …… 21p
深田久弥 …… 38p
福田赳夫 …… 29p
藤田東湖 …… 14p
B.タウト …… 32p
ベルツ　花 …… 15p
堀　秀成 …… 14p
堀　秀政 …… 5p

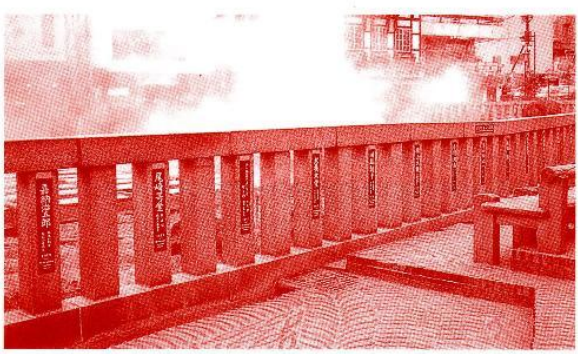
ま
前田青邨 …… 45p
前田利家 …… 7p
前田普羅 …… 42p
松浦武四郎 …… 17p
水野仙子 …… 21p
水原秋櫻子 …… 43p
源　頼朝 …… 2p
村松梢風 …… 36p
M.ジャンドロン …… 48p

や
山下　清 …… 44p
日本武尊 …… 2p
横山大観 …… 24p
与謝野晶子 …… 34p
与謝野鉄幹 …… 33p
吉田一穂 …… 40p
吉野秀雄 …… 35p

ら
力道山 …… 47p
良寛和尚 …… 11p
蓮如上人 …… 9p

わ
若山牧水 …… 23p

※外国人の方につきましては、姓ではなく、名前を索引として五十音順に並べてあります。



『草津に歩みし百人』発刊にあたって

「草津よいとこ一度はおいで」で始まる草津節と温泉で世界各地の人々に親しまれている草津温泉は、今から約1,800年の昔、大和朝のころ、日本武尊東征の帰途に発見されたとも、大和国菅原寺の僧・行基によって開かれたとも伝えられております。

このような歴史を背景に、西暦2000（平成12）年に、草津町は、町制施行100周年を迎えます。また、この年は、20世紀最後の年でもあり、21世紀への新たな時代に向かってスタートする大きな節目の年でもあります。

この度、町制施行100周年記念事業の一環として、千数百年の昔から今日までにおいでいただいた多くの方々の中から、100周年に数を合わせて100人に設定し、各分野の著名人のお名前を「湯畑」の石柵に刻名し、併せて本冊子を作成いたしました。

草津へおいでの皆さまには、ごゆっくりご覧いただきますようお願い申し上げますとともに、日頃のご愛顧に対し心より御礼申し上げます。

なお、本事業の実施にあたりましては、町民の皆さまに貴重な資料・情報の提供をお願いし、湯畑著名人刻名検討委員会を組織して、人選等の調査・検討をいただきました。

ご協力をいただきました関係各位に厚く御礼申し上げます。

草津町長　市川紘一郎

参考文献

『草津温泉誌　第壱巻』草津町誌編纂委員会
『草津温泉誌　第弐巻』草津町誌編纂委員会
『草津温泉誌　自然・科学編Ⅰ』草津町誌編纂委員会
『温泉草津史料　第一巻』中沢温泉研究所
『草津温泉史話』川合勇太郎
『[現代日本] 朝日人物事典』朝日新聞社
『朝日　日本歴史人物事典』朝日新聞社

『草津に歩みし百人』
平成11年4月25日・発刊

企画・編集　草津町役場企画開発課
〒377-1792　群馬県吾妻郡草津町大字草津28番地
TEL（0279）88-0001（代）FAX（0279）88-0002

印刷・製本　朝日印刷工業株式会社